

〈2 実践事例〉

1 題材名 「表したい自分を表現しよう」 —色と筆致を生かした自画像—

2 題材観

(1) 自画像について

「自画像」が、絵画表現の一つの重要な主題として、それを描く画家や、鑑賞する人々に大切にされてきたのはなぜでしょうか。

自画像が他のジャンルの絵画(風景画や静物画, 他人を描いた肖像画など)と異なる点は、描く対象が制作者自身だということです。鏡に見えるのは自分の外見(客体)ですが、見ている自分の意識は、知覚として

の自分(主体)です。日常生活でも鏡を見る時に、自意識が働き、不思議な感覚にとらわれることがあると思いますが、自画像制作では、像を見るだけでなく、支持体に新たな像を表現する



レンブラント『自画像』(1665)

るところまで踏み込みます。自画像制作において「自分とは何者なのか」「自分はどこへ向かうのか」というような、自己の存在に対する問いが生まれるのはそのためです。そして、完成された自画像には、制作者が自らをどのように見つめ、どのように表現しようとしたのか、その人の思想(生き方)が画面に反映されます。

レンブラントやゴッホが描いた自画像が、今でも人々の関心を集めているのは、絵を通して、絵が描かれた当時の作者の心情的な部分に触れ、自らと重ね合わせて鑑賞できるからでしょう。また、彼らの表現が、心情を感じさせたり、その解釈が分かれたりすることも含めて、味わい深いものになっているからだと思います。さらに、レンブラントもゴッホも、生涯を通じて数多くの自画像を描いているため、彼らの人生と照らし合わせて表現の変容が見られるということも大きな魅力になっているのでしょう。

自画像を題材にしようと考え、久しぶりに私も自分を描いてみました。自分で自分を見ていると、

「いつの間にかシミが増えているな」「髭の剃り残しがあるな」というような、30代後半になった顔の特徴が把握され、確実に肉体が年齢を重ねていることをまず感じました。

自画像を描いていると、否が応でもそこに在る客体としての自分が認識されます。自分の意志とは関係なく、そのような顔をして、そこに存在している自分。

「前向きに生きていきたい自分」をテーマに描いたのですが、私が考えたことは様々なことでした。「私を形づくっているものは何なのだろう、私は何者なのか」「確実に老いていく自分、10年後20年後はどのような姿をしているのだろうか」「私は何がしたいのだろうか、美術に携わって生きていきたい」などが、私が考えたことです。また、自分にとって一番身近な対象である「自分」を描いているはずなのに、とても「表現しきれた」とは言えず、いくら描いても描きつくせない、奥深さを感じました。



授業者『自画像』(2016)

(2) 筆致, 色について

自画像を絵の具で描く場合、平らな画面に筆を使って色をおいていきます。描くということは、制作者が眼に見えるイメージをそのまま表現しているつもりでも、制作者を介して描かれているため、眼に見えない何かを常に描き込んでいます。制作者の心の中にある考え、眼に見えない心の働きを、画面上に眼に見える色、形や線(筆致)を使って描き、表現したものが自画像です。筆のタッチを強く感じる筆致はイメージしやすいと思いますが、レオナルド・ダ・ヴィンチ作『モナ・リザ』のスフマート描法に代表されるような、筆の痕跡をほとんど感じさせない描き方も、筆で描いている以上、筆致が残っています。自画像を描くとは、そのような「眼に見えない心の働き」を、色や形、線を組み合わせてイメージを作ること

あり、感情や思想を同時に伝えることができる表現方法であるととらえることができます。

ゴッホの自画像を「色」「筆致」ということに注目して見てみると、画家の追求の結果としての変容が確認できます。

「色」についてですが、Aでは、肌は黄土色で、背景が茶色を中心とした暗色で描かれています。Bでは、肌の基調色は黄土色ですが、緑、黄、ピンクなど、背景は青、緑、黄が白との混色で描かれています。

「筆致」についてですが、Aでは額や髭、ネクタイなどの描写に、はっきりとした筆致が認められます。Bは全体が強い筆致で描かれていて、特に背景の渦をまく筆致が特徴的です。

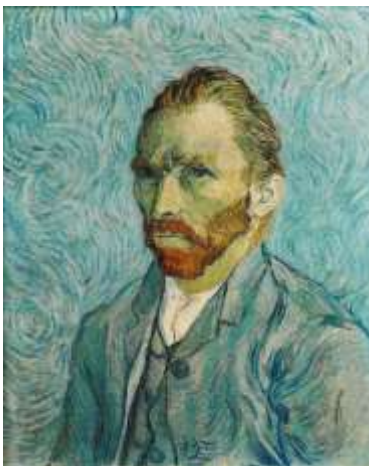
「色」「筆致」が、Bではより強く、画家の心情を表す表現として結びついています。それにしてもBは、強烈なインパクトで、精神の不安定さ、孤独、怒りといったゴッホの内面が強く感じられる作品です。

本題材では、子どもたちが表したい主題を表現するために、「色」「筆致」を生かして自画像を描いていきます。絵画として自画像を描くのですから、絵画を特徴づける、色や筆致がどのようにあるべきかを意識するのは当然のことであるとも言えるでしょう。題材構想では、自画像表現において「色」「筆致」に対する意識をもてるように、鑑賞活動（表現と鑑賞の一体化）を取り入れています。

(3) 忌野清志郎の自画像



A ゴッホ『自画像』(1886)



B ゴッホ『自画像』(1889)

忌野清志郎さんは、ロックバンド「RCサクセション」を結成した高校時代、美術教室に入りびたり、演奏活動が忙しくなっても絵に打ち込み続けていたそうです。後年も、音楽活動の傍ら、絵を描き続けていたことが知られています。

『自画像 1999 冬の十字架』を見ると、鮮やかな色彩で描かれています。表情は少し物憂げで、作者の内省的な側面を感じます。造形的特徴に注目すると、様々な色で描かれているのに立体感がしっかりと感じられ、陰影が意識された表現になっています。強く残された筆致が作者のエネルギーを感じさせ、画面全体に暖色が多く使われていますが、目の周りなどの部分に寒色が効果的に使われていることなども特徴的です。



忌野清志郎『八月の自画像』2006年

清志郎さんは、喉頭がんを宣告され、抗がん剤で髪がすっかり脱けてしまった時期に、『八月の自画像』を描いています。描かれている表情からは、深刻な病気を笑い飛ばしてしまうような、生きることに對する作者の前向きな心情が感じられます。

現代の職業画家ではない人が、「自画像」を描き、それが生きることに密接に関わっていたという事実は、自画像を描くことの意味を改めて私たちに考えさせてくれます。また、自らを飾らずに力強く表現した清志郎さんの生き方（作品）にふれることは、自画像を描くことに対する子どもたちの気持ちを後押ししてくれるのではないのでしょうか。

(4) 題材と子どもたち

自画像を描くということは、別のテーマで描くことよりも、自己の探求そのものであり重い課題です。しかし、中学3年という様々な葛藤をもち、自らの生き方を模索するような時期だからこそ、自分と向き合うことが、今後の生き方にもつながるのではないのでしょうか。子どもたちが「今」の

自分をどのようにとらえているかはそれぞれだと思いますが、順調に人生を歩んでいる人も、苦悩の中にいる人も、改めて自分自身と向き合い、自己のあり方について考える時間になればと思います。

実際に自画像を描くということになれば、自分を描くことに恥ずかしさを感じたり、内面を表現することに抵抗を感じたりする子どもがいることでしょう。題材構想は、制作の過程で生じるだろ

う困難を想定したうえで、子どもたち自身が、自画像を描くことへの自分なりの価値を見いだし、それぞれの課題を乗り越えていくことができるように考えました。

本題材は美術の授業で行う「表現」の最後の題材です。中学校卒業を間近に控えた子どもたちが、自分と真剣に向き合い、色、筆致を生かした表現を追求していく姿が見られることを期待しています。

- 参考文献：木下長宏（2016）『自画像の思想史』 五柳書院
忌野清志郎（2009）『忌野清志郎の世界』 ぴあ株式会社
幸福輝（2011）「もっと知りたい レンブラント」 東京美術
芸術新潮 2003年11月号『特集 レンブラント 終わりになき挑戦の画家』 新潮社
木下長宏編（1999）『ゴッホ 自画像の告白』 二玄社

3 学習指導要領との関連

A 表現

- (1) 感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を指導する。
- ア 対象を深く見つめ感じ取ったこと、考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に、主題を生み出すこと。
 - イ 主題などを基に想像力を働かせ、単純化や省略、強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練ること。
- (3) 発想や構想をしたことなどを基に表現する活動を通して、技能に関する次の事項を指導する。
- ア 形や色彩などの表し方を身に付け、意図に応じて材料や用具の生かし方などを考え、創意工夫して表現すること。
 - イ 材料や用具の特性などから制作の順序などを考えながら、見通しをもって表現すること。

4 授業実践

(1) 鑑賞とテーマ設定

子どもたちに、忌野清志郎さんの『自画像 1999冬の十字架』（1999）ア、『八月の自画像』（2006）イを提示しました。清志郎さんについて、知っている子どももいました。ロックミュージシャンとして活躍していたことを確認し、本人が歌っているライブの映像も紹介しました。作品を鑑賞し、「忌野清志郎さんの自画像を鑑賞して、気づいたことや感じたこと」を考察しました。個人で考えた後、全体で発表していききました。



- ・アは、背景が明るくカラフルで、絵の具をあまり混色しないで、そのまま色が使われているような感じがする
- ・イはいろいろな色が使われているけれど、陰になっているところは青や紫など暗い色が使われていて、実際にはありえない色だけれど立体感・質感が感じられる
- ・アの背景は顔を中心にして、筆致が拡散するように残されていて、ロックな感じというか、エネルギーを感じる
- ・アは、派手な色が使われているけれど、目線が下向きになっていて、不安とか不満があったように感じられる
- ・アは背景に多くの色が使われているのに、②は基本的に青で塗られている。しかし、青はベタツとした塗り方ではなく、色の濃淡がある。

- ・アは、ステージの上にいるような派手な感じがする。イは、悟りの中にあるような落ち着いた感じがして、背景の青には清々しさを感じる など

子どもたちの意見や疑問を受けて「八月の自画像」は、作者が抗がん剤治療を行っていた時期に描かれた作品であることなど、鑑賞の深まりにつながるだろうと判断した事柄については、説明を加えました。意見が語られる中で、作者が「表したい自分」をどのように考えていたかについて考察された発言を大切にしながら、子どもたちの考えが深まるようにかかわりました。

そして、「忌野清志郎さんにとって、自画像を描くこととはどのような意味があったのだろうか」を聞きました。

- ・自分の意志や思いを確認する意味があったと思う。アは自分の心に秘めた何かをこれからも伝えていくぞというような気持ちが感じられる。イでは、病気になっている時期だけれど、復活するぞとか、負けないとか、そのような意味が込められていると思う。ふっきれたような感じがするのは、自分のやりたいことを再確認できたからだと思う
- ・心の内に秘めている本心をぶつける意味があったと思う。私はどちらも葛藤を抱えている時期に描かれたと感じた。スポットライトを浴びていても、内に閉じこもっているア。まっすぐ前を見つめつつも病気の不安が感じられるイ。歌を歌うために、それらの思いを絵で表現することも大切にしていたのだと思った
- ・今の自分を表すと同時に、自分の心を整理する意味があったのだと思う。私もよく自分の気持ちが絵に反映される。楽しい気持ちだとキレイに色が塗れるし、その逆もある。また、絵を描いているとだんだんと心が穏やかになっていき、整理がついてくることがある。清志郎さんにとっても、そんな意味があったのではないかな など

2時間目に、レンブラント（①1632年②1665年頃）とゴッホ（③1886年④1889年）の作品を提示しました。作品を見た子どもたちに、「それぞれの自画像を見比べて気づいたこと」を聞きました。

- ・レンブラントの自画像は明暗の違いがはっきりしていて、光があたっている方向がわかる。人物の存在感がある
- ・レンブラントは自画像②の方が、筆致が強く感じられる。②の自画像では、特にターバンのところなど、筆の向きもわかるし、荒々しい筆致になっている。また、①は輪郭がはっきりしているが、②は輪郭がぼやけた描写になっている
- ・レンブラント①の自画像は目にハイライトがある。目にハイライトがあることで、②と比べても表情が明るく感じられる
- ・ゴッホの自画像③は、背景が暗く人物の明るさが際立っている。自画像④では、背景の水色に近い色が服にも使われていて、輪郭ははっきりしているけれど、人物だけが際立って明るく描かれているという感じではない
- ・ゴッホの自画像④は背景の筆致がうずをまいて、この翌年に亡くなっているし、何か予感させるようなものがあったのかな など

参考作品で挙げたのはそれぞれ2作品でしたが、レンブラントもゴッホも、後年の自画像の方が、筆致が強く残っている点が確認されました。また、ゴッホの自画像④の背景には、水色が主に使われているが、清志郎さんの自画像の背景の水色と比較するとどんな印象か、子どもたちに聞いてみました。同じような色であっても、ゴッホの絵の厳しい表情や、うねるような筆致の影響からか、受ける印象は大きく異なるという感想が聞かれました。

さらに「色」「筆致」に注目しながら、エゴン・シーレ、マックス・ベックマン、藤田嗣治、岸田劉生の自画像を紹介しました。本題材の課題「表したい自分を表現するために色と筆致をどのように生かしていくか」を確認しました。

試作品として「目」（目の周りの肌の描写も含む）を描くことを、参考作品の提示とともに伝えました。「表したい自分」（主題）を「色」「筆致」を意識して、「目」を描くことで表現することを確認しました。参考作品



を提示し、「大きく描くこと」「バランスの取り方」など、目を描くための基礎的な技法については説明を加えました。鏡と、試作品用に横長に裁断した画用紙（縦7cm×横17cm）を配付しました。次時に1時間だけ着色の時間を設けることを伝え、授業の後半は、試作品の下絵を描きました。授業後には次のような感想が追求の記録に記されました。

- ・ゴッホとレンブラントはそれぞれ明暗や質感、筆の使い方にもこだわって、表情が豊かに表現されている。自分が描く時には、バランスをよく考えて描いていきたい
- ・小学校の時に一度描いたことがあるけれど、ここまでしっかり描いたことはなかった。バランスとか大きさとか意識して目を見ていたら、新鮮な感じがした
- ・「常に上をめざす」という決意を込めて、上向きの目にした。よく見ると、まつ毛、涙袋、白目、黒目、まぶたなど、様々なパーツから目が構成されていることがわかった。物と違って、線の向きが一定ではなく、線の特徴をつかんで描くのが難しかった
- ・自分の目をまじまじと見ることがなかったので、新しい発見があった。目の下の影や、二重の幅などがポイントだと思った。色は寒色系にして冷めた感じにしてみたい。色塗りが楽しんだ

(2) 「目」を描く

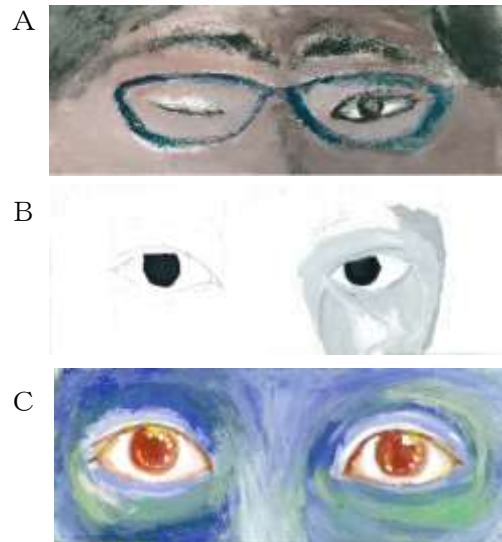
前時に描いた下絵に着色を行いました。「表したい自分」が表現できるように、「色」「筆致」を意識して描くことを確認しました。色をつけて



いく基本的な手順として、身体の内にあるものから外にあるものの順で描いていくと描きやすいことを伝えました。また、今回は試作品の制作であるので、短い時間ではあるが、試してみたいやり方で思いきりよく表現するように伝えました。子どもたちはどのように表現すればよいのか悩む様子もありながらも、「色」「筆致」を意識し、着色をすすめていきました。

- A 厚く塗ることと、濃い色で塗ることを意識してやってみたが、失敗した。指でなじませてみたら、なんとか肌らしさが出た。本制作でも、水でなじませながら塗ろうと思う
- B 今回は表情、特に顔の凹凸を強調して表すため、白、黒、灰色で塗ってみた。筆致についてはまだ考えがまとまっていないので、考えていきたい
- C 迷いはあるけれど、未来へ進んでいく自分を表現しようとした。肌いろいろな色を使い、目が輝いている感じを表現した。赤と青で「意志の強さ」を強調するようにした

など



(3) 主題に迫るために「色」「筆致」をどうするか

考える

前時に描いた「目」の試作品をもとに、「表したい自分を表現するために色と筆致をどのように生かしていくか」をふまえて話し合いをしました。それぞれの試作品に対して、小グループで具体的な感想や助言を言い合いました。

〈Bの試作品についての語り合い〉

- ・考えている時の自分を表したいと考えた
- ・白と黒のシンプルな色で描かれていて、瞳が強調されている
- ・光が意識されていて、明暗の効果が感じられる
- ・明暗を大切にすれば、光の方向をそろえるとよいのではないかと

- ・やはり、「考えている時の自分」をテーマに表現していきたいと思う。考えている時の思考（文字，図，数字など）を表すため，白，黒，灰で表現していく。顔の凹凸を意識し光による明暗を，細かく，なめらかな筆致で表現していきたい

〈Cの試作品についての語り合い〉

- ・いろいろなことで迷っているけれど，目を真っ直ぐに描いて，前に進む自分を表したかった
- ・眼力を強く感じる，瞳の中にも明るい部分があって輝いて見える
- ・色がとてもきれいで，瞳の描写に透明感がある
- ・肌や目の周りの強い筆致から，前に進もうとする力強さを感じる
- ・本制作では「表したい自分」のイメージを変えて，自然体なありのままの自分を表現しようと思う。明るくポジティブな感じを表現するために暖色を主に使っていきたい

など

意見交換後改めて，作品構想のためのワークシートを配付し，「表したい自分」「色」「筆致」「その他」について，具体的に構想を行いました。顔の向きや構図についても計画できるように，アイデアスケッチ用の枠を入れました。子どもたちは，試作について意見交換したことをふまえ，構想を進めていきました。

- ・陰のつけ方については良いと言ってもらえたが，視線を前に向けた方が，前向きさが出るのではないかという助言をもらった。本制作では，背景をどのように描写するのかということも工夫していきたい
- ・班のみんなに助言をされて本制作の見通しがもてた。テーマは変えずに，助言を生かしながら進めたい。見えているものだけでなく，自分の内面の個性を表現していきたい

など

(4) 作品制作

作品はA4サイズで，キャンバス地の紙を使用しました。構想後，下絵を描き，着色を進めていきました。下絵を描く際，顔のバランスが上手くとれないなど，顔をデッサンすることに対してつまずきの生じる子どもがいます。今回は「色」「筆致」の表現の工夫を大切にしたいと考えていたの

で，写真を撮って参考にしてもよいことを確認し，支援しました。鏡を見て描いていくことを大切にしたいと考える子どももいて，写真を撮ったのは約半数でした。

- ・「いつも前向きな理想の自分」を表したい。そのためには色使いがポイントになると思うので，前向きな気持ちを色で表現していきたい。また，目の表情で，強い気持ちを表現したい
- ・顔の輪郭が意外と難しい。左右があってなかったり，大きさが変わってしまったりしてしまう。目や鼻の位置が違っているとイメージが大きく変わってしまうので気をつけたい
- ・顔の丸さを強調しようと思い，コンパスを使おうと思ったが，機械的な表現になってしまうと思ったので止めた。自分の手で描く線を大切にしながら下絵を描いていきたい

など

授業者は「表したい自分は何か」ということを問いなおしながら，かかわることを意識しました。髪の毛のボリュー



ムの表現するために，細い線で塗り重ねていくというような，基本的な描画方法については，全体にも説明を入れました。子どもたちは，それぞれの表現上の課題と向き合いながら制作を進めていきました。

- ・顔のベースとなる肌色を下地に塗っておいてから，筆致を入れて変化をつけていこうと思う。混ぜる色を試しながら進めていきたい
- ・鼻と頬の光が当たっている部分に白を加えて明るくしたら，光の感じが表現できてよかった。頬の色味も工夫して描いていきたい
- ・顔の描写を一通り終えることができたが，高みを目指す自分を表すために陰影をもっと強めたい。髪の毛が風になびいているような感じにして透明感を出せるようにしたい

など

次は，完成した作品とコメントです。



A



B



C

D

A 「情熱に燃える自分」をテーマに描いた。凹凸の描写では明暗を意識し、光と影を色の濃淡で表した。濃淡をつけるために、何度も絵の具を重ねて、少しずつ変化をつけられるように、筆の向きにも注意して着色した。背景は炎をイメージして熱を感じる赤、黄、橙などを使い、ゆらめくような筆致で描いた。髪の毛や眉毛、服の色にも赤を混ぜ、画面全体でメラメラと燃える感じが出せたと思う

B 「光を見透える自分」を主題として描いた。光は未来や将来、希望を表している。目に光を宿らせ、他の部分は白と黒の濃淡（一部、他の色を混ぜた）で表している。目の描写にはメディウムを加えて、光沢感を出した。周りの色の暗さは、未来や将来への不安を表していて、筆致も円を描くようにモヤモヤしている感じを意識した

C 「大空の下で自分を見つめる自分」をテーマに描いた。毛の一本一本を表現するために、筆先を使い、睫毛や眉毛を特に丁寧に描いた。肌の色は、頬の赤みが表現できるように注意した。黒目の瞳孔部分を茶と黒を使って変化が出せるようにした。背景は大空に自分が溶け込んでいようなイメージで、雲は水を少なめに描いた

D 「夢に向かう自分」をテーマに描いた。夢や将来への明るい雰囲気を表すために、黄色をメインに色の変化を意識した。光のあたる部分は白を加え、影は暗くするなど、濃淡をつけた。ベタ塗りにならないように、淡く変化をつけたい部分は、水を含ませて指でのばした。自分からみなぎるエネルギーをイメージして背景を明るいオレンジのグラデーションで描いた。表したい「夢に向かう姿」を表現することができたと思う

など

(5) 制作のふり返し、鑑賞会

制作後、自分の表現をふり返し、作品票に記入する時間をとりました。その後、一人一人の作品を実物投影機で表示し、



発表を行いました。発表者は、「表したい自分」をどのように考え、「色」「筆致」の表現で工夫したことは何か、作品についての説明をしました。発表を終えた後、題材のふり返りをワークシートに記入し、授業を終えました。

- Aさんの作品は赤を基調とし、背景も人も全て赤が使われていて、画面全体の統一感があった。本人が言っていたように、メラメラした「情熱」という雰囲気を感じられた。髪の毛一本一本の描写にまでこだわって表現していた
- Bさんの作品は、本人が伝えたいという自信と不安というものがストレートに描かれていると思った。実際に光が当たっているように感じられ、目の部分に使われている黄色から、未来を見すえている感じが伝わった。ベタ塗りではなく、点描のような筆致で、落ち着いて未来を冷静に見ているような雰囲気が感じられた
- 自分の作品をみんなに紹介することで、自分の絵のよさも改めて感じる事ができた。緑色で

塗った部分がうまくアクセントになったと思う。今までの表現よりもすごく気を使って、細かい部分まで描けたことがよかったと思う

- 一人一人が自分と向き合う時間になったと感じた。最初はただ単に自分の描きたいように描くという感覚だったが、「表したい自分」を描くということを思いだし、自分なりに表現することができた。絵の具の扱いに慣れるまでの時間もあつたので、表現の工夫ができた
- 人それぞれ表したい自分や表し方が違って、顔や背景の色や筆致を工夫して描いていてすごいと思った。自分もどうやって表したい自分を表すのかをよく考えて表現した。似ているかどうかではなく、「表したい自分をどれだけ表せているか」だから、みんなよく表せていたと思う
など